

質疑応答

[Q1] モニタリングの内容は生物調査だけなのか？無機環境の解析、例えば津波によるヘドロなどは調査しているのか？

[Q2] トップの意見だけで、調査・計画を進めていいのか？その場、その時だけの成果になってしまう恐れはないのか？

⇒ 住民への説明と理解、住民の意向が重要。ただ、住民の意向を待つだけでは、復旧・復興は遅くなってしまう。

[Q3] 生態学会の中で(生態学者間で)、合意形成や共通の理解ができているのか？

⇒ 周辺の生態系、生物多様性について、生態学者が問われる場が増えてきたのにもかかわらず、生態学者は、これまで、そのような場において、生態系の重要性、生物多様性の重要性が正しく伝えられていなかった。

⇒ 生態学者自身が、生態学(生物生態、環境)を正しく理解しているのか。例えば、「森は海の恋人」と言われているがその科学的な要因は？腐植質が入っているのは本当か？という事実・仕組みが科学的に証明されていない。

⇒ 生物調査の重要性は理解できるが、「なぜモニタリングが重要か」という質問には答えにくい(答えられない)・即物的な答えがない。5年前の基礎調査があったから、現在の状況が理解できる、何が発生したかが明らかにできる。だから、継続的なモニタリングは重要。震災があったからこそ、モニタリングの重要性が理解できた。

⇒ 多くの事例から学ぶことが、今回の震災を含めて、たくさんある。

[Q4] 各プロジェクトにおいて、参加・協力してもらっているボランティア団体、NPO団体との連携状況はどのようになっているのか？

⇒ 生態学者を中心に、市民を巻き込んだ活動を進めている。

⇒ 市民をモニタリング調査に巻き込んで、生態系(環境)を理解させる。それが伝われば、堤防(人工構造物)から湿地(自然空間)、理解してもらえなければ、堤防に。

[Q5] 生態学者がやっていることと、それ近い人がやっていることの違いとはどのようなことなのか？

⇒ 学問と興味関心の違い

[Q6] ボランティア、市民、行政との対立内容(NPO 田んぼ)

- ⇒ ボランティア側が提示する作業と県が提示する作業の違い。作業内容によっては、助成金(復興にかかる資金)が得られない。(ボランティア活動では、作業の多くが手作業・人海戦術だが、県(農林水産省)の活動は、表土をはぎ取り、水を入れて排水、除塩)
- ⇒ ボランティアが復興計画を農家、行政に無理やり押し付けてしまった
- ⇒ 補助金の問題、復興するまでの期間(手作業では時間がかかる)の違い

#### フロアから意見

- ✓ 地域の自然史博物館は、地域の合意形成にとって重要。特に、三陸復興に関しては、既存の自然史博物館などは重要な意味・位置にある
- ✓ 一般市民にとっては、ボランティアが植栽する植物(スイセン、ヒマワリ)、現地の自然(シイ・タブ等)、被災した陸前高田のマツはいずれも同じように理解されてしまう
- ✓ 震災復興には直接的 content と間接的 content がある(山形の立場)
- ✓ 生態系サービスの価値と(原子力に代わる)自然エネルギー(代替エネルギー)が同じ天秤に掛けられている。これは、今まで生態系サービスの価値に関して、正しいトレードオフの考え方が伝えられてこなかったせいではないか？
- ✓ 教材(ブックレット、映像)の作成に生態学の知見を活かす活動が必要(CEPA の活動)。
- ✓ 持続可能な教育として、子供・若者への生態系への興味関心・知識を高めるようなアプローチも重要だが、復興に向けては、政策決定者へのアプローチが可及的速やかに必要。
- ✓ 復興計画と湿地の問題。特に、ラムサール登録湿地となった湿地は、一般の人の観察が困難。これでは、湿地の重要性が伝えられていない(伝えることができない)。これをもっと広く伝えることが、被災地の復興・復旧には重要ではないか(湿地 CEPA)。
- ✓ プロジェクトの立ち上げを可視化する。
- ✓ 生物多様性が重要、湿地が重要と言われても、復旧の場面では説得力がない(例：北上川の田んぼ)